サイバー時代におけるガンジー主義と仏教

N・ラダクリシュナン
中川連一郎 訳

私の講演テーマは、調和しがたい言葉の組み合わせではありますが、「サイバー時代におけるガンジー主義と仏教」です。

一　ブッダとガンジーの思想

仏教の特徴について考える場合、その起源やブッダが説いた問題の核心について考えるべきでしょう。釈迦牟尼として知られるブッダは、二千五百年ほど前に、当時の社会の習慣に反対し、人々の分断に対して挑戦しただけでなく、宗教的慣習や宗教の名において横行していた抑圧的なシナリオに対して、全体論的かつ総体的な展望を掲げました。当時は社会学も現在のように発展しておらず、経済学や人類学も同様でした。今日のような歴史学もなく、地理学、天文学、その他の学問もまた然りでした。人類の努力と活動の主要な舞台は、皆様ご存じのように宗教的慣習に支配され、統制されていたのです。当時の宗教的慣習は、ヒンズー原理主義者によるイスラム寺院の破壊やシバ神の武器である三叉の矛の分配運動、連続爆弾テロ、あらゆる信仰の名のもとに人々を殺戮することなどのように、

今日理解されているような意味合いでは捉えられていませんでした。それは、多かれ少なかれ、倫理や道徳、精神性の原則、善なる生活の原則によって支配されていました。しかしそれらは、聖職者に率いられ有能な取り巻きたちに支えられた、既成の宗教団体に乗っ取られていたのです。今日の人類が忌み嫌う物事のすべてが、当時起こっていました。ブッダが反旗を翻したのは、こうした抑圧的なシステムに対してだったのです。

彼は「不殺生は最高の真理（法）である」と言い、それから二千五百年以上経ってから、ガンジーは「不殺生、真理、不偸盗」と主張しました。宗教の基盤、道徳や人間的な生活の基盤、あるいは私たちが哲学と考えうるものすべての基盤、また生命そのものの捉え方さえも、アヒンサーに基づく原則によって形成されなければなりません。ブッダとガンジーの、この二つの言葉の符号をみてください。ブッダは、はるか昔に「不殺生は最高の真理（法）である」と言っているのです。アヒンサーほど崇高な美徳はありません。ご存じの通り、アヒンサーは「殺さない」ことだけを意味するのではありません。おそらくそれが、西洋人が用いる同義語としてはもっとも近いと思いますが。アヒンサーには、美しいサンスクリット語の言葉「シャンティー」（平和、寂静）と同様に、完全な同義語はありません。ご存じの通り、シャンティーはただ平和を意味するのではありません。今日にいたるまで、この二つの表現は正確に翻訳されていないのです。私たちは、もっともそれに近い意味の言葉を探しています。さきほど申し上げたブッダの言葉、「不殺生は最高の真理（法）である」についても同様です。それはガンジーにとっても同じことでしたが、彼は、ブッダをはじめとするインドの伝統的な偉人たちの基礎の上にたって表現しました。ガンジーは、ブッダの言葉を彼の理論に取り入れる際に、それを少し改良しました。これは、アヒンサーの思想を翻訳することを意味し、アヒンサーの思想をパンや日常生活における様々な必需品と同じ次元に展開することを意味していました。

後に、マーチン・ルーサー・キングも別の言い方で

同じことを言っています。「私は、クリスチャンの家庭に生まれたことにより、また私の学んだ聖書によってキリスト教徒である。そして、常に私とともにあり、そこから一日を始める聖書が、私に愛の意味を教えてくれたのである」と。

二　現代社会におけるガンジー主義の意義

しかし、愛の効力を証明し、愛を単なる美徳とするのでもただの原則とするのでもなく、人間の変革、個人のエンパワーメント、社会的解放を決する焦点としたのはガンジーです。これらの三点は新たな発見であり、思想と実践の関係における革命とさえ言えるほどのことでした。ガンジー主義について考えてみましょう。ご存じの通り、ガンジー自身はこの「ガンジー主義」という表現に反対していました。彼はこの表現を好ましく思っていなかったのです。ガンジー主義と呼ばれるものは存在しないのです。しかし今日、私たちは皆ガンジー主義者であり、学術機関の数だけガンジー主義の流れがあります。ですから、ガンジー自身は「私の去ったあと、もし私の望みを聞いてくれるなら私は幸せだ。私が書いたものはすべて私と一緒に埋葬しなさい。私は私が行ったことによって思い出されるべきである」と言いましたが、私たちはこのガンジー主義という表現を用いることを承諾してもらわなければならないのです。これほどの情熱をもって語った人間は、ガンジー以外にはいません。偉大な教師たちは皆そうでしたが、ブッダも、ご存じのように晩年は幸福ではなく、分裂や大きな意見の相違があり、いまでも、彼が語ったその時に彼が意図したことを正確に説明し、人々に理解させるために、多くの論争が起きています。ガンジーに関しても同様です。私たちは、社会・経済的あるいは宗教的という二つの異なった状況のなかに生き、それぞれの方法で社会に無上の貢献をなした、人類の偉大な教師たちをみることができます。

政治的なレベルにおいて、ガンジーは重要な貢献をしました。精神的あるいは倫理的なレベルにおいて、宗教的価値に新たな方向性を与えることで、また宗教的価値を普通の人々の生活に統合する方法を示すこと

で、ブッダは人類に新たな方向性を与えました。この聖人の後を継ぎ、ガンジーはそれを拡大したのです。「倫理的な考察のない政治システムは死であり、魂のない抜け殻であり、普通の人々が生活のなかで直面している問題を考慮しない宗教システムは無意味である」と彼は言っています。そして私たちは、いったいいつまで宗教的価値や私たちが発展させた宗派の名のもとに争い続けるのでしょうか。私たちは実用主義へと向かっていくのでしょうか、それとも教条主義へと向かっていくのでしょうか。もし教条主義に向かうのなら、経典に説かれていることがすべてであり、私たちはそれをこえることはできないと言わなければならないでしょう。こうしたことが、今日世界中のほとんどすべての主要な宗教において起こっているのです。しかし、国内的にも国際的にも多くの人々に受けいれられ、変化をみせている一つの宗教が仏教です。

三　現代社会における仏教の意義

仏教は、ブッダの時代をはるかにこえて生きつづけています。今日実践されている仏教をみてみましょう。それは、ブッダが唱導した仏教そのものではないかもしれません。しかし、それは少なくとも世界のある地域で実践されている仏教であり、驚くべき柔軟性と非常に理解しやすく消化しやすい原則であり、稀有の調和のなかで息づく人々や、悲しみや喜びを表す人々、そして建設者たる人々を結びつけているのです。これは十三世紀の日本で始まりました。この新しい試み、集団的試みは、宗教をドグマとしてみるのではなく、新たな人間革命への跳躍台としてみます。このプロセスは、日本において日蓮が仏教を新しい文脈のなかで解釈したことから開始されました。

二千五百年前に仏教が興ったころ、サイバー時代について語る者はひとりもいませんでした。コンピューターなど夢にも思いつきませんでしたし、自動車もエアコンも誰も考えつきませんでした。精神的、倫理的、道徳的原則がすべて完全に崩壊することなど、誰も夢想だにしませんでしたし、お金だけがすべての基礎であり、すべてはお金に操られ、お金をもとに評価され

る状態に、人類がおかれることなど誰も夢想だにしませんでした。倫理的原則、道徳的考察、精神的考察のない生活は残忍なものです。まさにこれが、今日国内で起こっていることなのです。ご存じのように、「不殺生は最高の真理（法）である」の真意は、現在では「殺生は最高の真理である」ととりちがえられているようです。多くの人々を殺すことに、なんの挑発も必要ないのです。

三日前、シャンティ・サイニクス（平和活動をするインドのボランティア団体）の人たちと一緒に、ムンバイの、以前連続爆弾テロが起こった場所で一日過ごしました。もしこのホールに連続爆破事件のテロリストが紛れ込んでいたとしても、誰が死んだのかは明らかにされないでしょう。政府は真実を語りません。政府機関は真実を隠蔽するように訓練されているのです。実際に何人が殺されたのかは誰にも分かりません。政府やCBI（中央捜査局。インドの治安機関）の情報によれば、「多くの人が亡くなった」というだけです。しかし、もしテロリストが紛れ込んでいたとすると、そのテロリスト以外の亡くなった人々は、無実の人々なのです。いくつかの宗教の教義やいくつかの政治的イデオロギーが、こうした自爆テロの原因とされています。今日、至るところに広まり、我々を支配しているのは、殺戮の本能であり、お金をためる本能であり、人間生命を持続させてきたすべての原則を否定する本能です。そして、人間の生活を過去から現在にいたるまで改良してきたすべての価値を投げ捨てることです。私たちはここで何ができるのでしょうか。宗教は死んだと言う人々がいます。あらゆる討論の場で、私はそれを耳にします。道徳は死にました。実際、精神性も倫理も、死に絶えてしまったのです。

では、何が生き残っているのでしょうか。もしすべてが死んでしまったとしても、彼らは「金は死んでいない」と言うでしょう。しかし実際は、お金だけでは決して人間の幸福は保証されませんでした。お金はより多くの人を悲惨にし、不幸にし、彼らの人生を、お金を持たない人々の人生よりも不安定にしてきました。だとしたら、私たちはこの状況からどこに向かえばいいのでしょうか。日蓮は、仏教の教えを真理の出現という文脈のなかで解釈しました。生命は決して静的なものではありません。あたかも、小さな若木が二枚から四枚、そして五枚と、やがて巨木になるまで日々葉を増やしていくように、生命は変化していくものです。若木は急速に成長して一日で巨木となる訳ではありません。空気や水やミネラルや光を吸収して成長します。多かれ少なかれ、それは自然が与えてくれるものに条件づけられています。

もし、これが自然のなかで起こっていることであり、私たちが自然のなかにみてとれるすべてのことであるならば、人類はこの認識を示していないし、このことの最大の被害者は私たちの宗教なのです。宗教はより教条的になってきており、古い意味で宗教的になってきています。宗教は革新的にならなければなりませんし、人類の状態を調整する装置にならなければなりません。これは偶然ではありませんし、仏教思想に関する私のつたない研究から言うべきことは、これは世界中で起こっていることですが、日蓮の解釈によって仏教は、後に創価学会の友が取りあげた新たな形態を得たのです。これ以上深くは述べませんが、私が言いたいのは、この新しい仏教は創造性を示しているということです。明日から開催される法華経展もまた、このことを示すものでしょう。

四　サイバー時代における科学と宗教

インドにおいてガンジーは、以前からこの危険に気づいていました。そして彼は、「あなたの宗教やあなた自身や、その他あれこれのものへの執着によって、あなた方が人間のなかに人間をみることを妨げるべきではありません。あなた方は、新しい宗教的アプローチをもつべきなのです」と言って、この国に新しい宗教的アプローチをもたらしました。このアプローチというのは、あなたがヒンズー教徒であっても、キリスト教徒であっても、イスラム教徒であっても、ユダヤ教徒であっても、ジャイナ教徒であっても、仏教徒であっても、ヒューマニストになれるということであり、平等に人間であるということです。これは、あなたが

他の宗教への尊敬の心をもとうとさえすれば可能なのです。私たちはとても偏狭になっており、ある意味では、原理主義的になってきています。他の宗教を軽蔑することで、自分の宗教がいかに強いかを証明する宗教が存在します。仏教は反対に、他者を軽侮してはならないと教えています。他人をも尊敬するのです。こうした仏教の伝統からなのか、それとも他の伝統からなのか、あるいは彼自身の伝統からなのかは分かりませんが、ガンジーはすべての宗教を等しく尊敬するというこの考えを採用しました。これが、ガンジーの宗教的アプローチであり、本質的な宗教理解でした。彼は、これが発展することを望んでいたのです。

そして、すべてが科学の論理に条件づけられているサイバー時代にあって、宗教はいまのところ後方に追いやられています。現代の生活を豊かにするための重要な位置を与えられていません。これら全体に、新鮮な目を向けることが可能でしょうか。私は二、三分で結論を下すことができます。新鮮な目を向けるためには、過去に逆戻りしてはいけません。ガンジーは、彼自身が科学技術について語るとき、そのことを理解していました。彼は、科学技術が、国内に人的資源が溢れているにもかかわらず、人間を萎縮させ、機械に隷属させることにだけ反対していたのです。彼は、科学技術自体に反対していた訳ではありません。彼自身、科学技術を大きく活用していました。

このことについてのガンジー主義的観点とは、科学技術を活用するのは良いが、その奴隷になってはいけないということなのです。決して科学技術による自由という成果を否定している訳ではありません。しかしそれどころか、現在では人間が科学技術の一部分となってしまっています。そして後戻りはできません。しかし、人間の指がもつ神秘が、ただボタンを押すことだけに使われているこの時代に、科学技術は私たちに、すべての人間的価値を隷属させ、すべての人間的価値にブレーキをかけるに十分な自由を与えているのでしょうか。人間の感情に、人間の知性に、そして人間の能力に、いったい何が起きたのでしょう。人間の能力や感情、そして人間の関心を統合しようとするならば、

倫理的原則、道徳的原則、そして精神的原則を尊重しなければなりません。

五　むすび

私たちは宗教の名のもとに、互いに衝突しようとしているのでしょうか。それとも私たちはあわれみ深くなり、私たちの生活を生きやすいものにしようとしているのでしょうか。かつては、知識は東洋から西洋へ渡ったと言われていました。人類のもっとも偉大な教師たちのほとんどは、東洋に出現しています。キプリングは「東は東、西は西、ついに両者は出会うことなし」と言いました。まったくありえないことだと。これは、植民地時代の高みから見た、西洋人の傲慢な主張です。植民地時代は、科学技術によって後を継がれ、農業の改良が後につづき、そして、ヒロシマ、ナガサキで初めて使用された、ほとんど悪魔的、破滅的な兵器の開発に後を継がれました。いまや、西洋から東洋へ、西洋からその他の地域へという潮流に変わってしまいました。支配の武器は経済であり、宗教は二の次で、倫理の居場所はどこにもなく、道徳などもってのほかです。あるのは、お金と力の二つだけです。ここにこそ、生命肯定の宗教である仏教の重要性があり、ガンジー主義の原則、特に宗教についての新しい展望、すなわち共生やすべての宗教に対する同等の尊敬などの理念を発展させるためのガンジーの奮闘の重要性があるのです。では、どうすればそれを実現できるでしょうか。おそらく、このことについて考えなければならないでしょう。しかし誰一人として答えをもち合わせてはいません。テロリズムが存在する今日、誰の生命も保証されていないのです。どこで何が起こっても不思議ではありません。夕方になると、誰もが無事家に帰りつけるかと不安になるのです。これが現状です。そこには、特別な熱があります。贅沢の熱、傲慢の熱、無知の熱、殺戮への欲望の熱。出口はいったいどこにあるのでしょう。その出口は、かつて宗教の核心であった、それぞれに潜在する力、倫理の力、精神の力、道徳の力を、すべての人間に取り戻させることです。

私は過去への回帰を唱えているのではありません。

これは、創造的な人生と、敏感な人間や生命の価値に関する肯定的な主張にもとづく、生命という宝石を意味しているのです。

これが、池田ＳＧＩ会長が我々に贈ってくださった思慮深いメッセージの意味するところでもあります。この合同シンポジウムは、新しいアプローチを創出しゆくための燦然たる一歩であり、このシンポジウムの開催を実現した東洋哲学研究所、ネルー記念博物館、国立ガンジー博物館、またその他の諸機関、参加者の皆様、日本から来られた皆様に感謝申し上げます。

（Ｎ・ラダクリシュナン／マハトマ・ガンジー非暴力開発センター議長）

（訳・なかがわ　れんいちろう／デリー大学大学院）